

女川原発見学記

5月11日に、川井さん、粕谷さん、長谷川で女川原発を訪れた。女川原発は昨年3月11日に被災して運転停止中。女川町、石巻市の地震・津波被害のすさまじさと併せて報告します。

5月11日（金）

東京駅に8時過ぎに集合。川井さんは数日前から腰を痛めていて、ちょっとつらそうに現れた。粕谷さんは火曜日に研修旅行から帰ってきたばかり。大丈夫かな。

8時40分発の新幹線「やまびこ53号」で仙台に向かう。仙台には10時33分、予定通りに着。早速予約していたレンタカーに乗りこみ女川に向かう。天候は曇り。石巻までは、3.11の被害は特に目につかない。高速を石巻河南ICで降りる。突然石巻の惨状が目の前に現れた。あまりの惨状に車を止めたい気持ちになるが、女川で町会議員の高野さんと13時に会う約束をしていることもあり、帰りに寄ることにして先を急ぐ。道路は次第に人家を離れ山間部に入るが、その道路が波打っている。仙石線のレールが外されており、草がぼうぼうと生えている。既に1年以上たっているのに全く修復されていない。

突然、目の前が開け、信じられない光景が表われた。女川町である。ただただ、がれきが目の前に広がって



破壊された女川町役場

おり、それ以外は何もない。それは恐ろしいとしか

表現しようのない、荒涼とした光景だった。3人は車から降り、激しく破壊された町庁舎、まるでおもちゃのように引くりかえったビル、等の写真を撮った。



女川街の光景

高野さんとは、高台にあってかろうじて無事だった女川病院で会うことになっていたもので、そこに向かった。病院の中にある、付近で唯一の食堂でお昼を食べる。この4月ようやく再開したお店だ。この病院は女川港を見下ろす高台にあるのだが、それでも1.6mの高さまで津波が押し寄せ、1階は壊滅的な被害を受けたとのこと。津波が来た高さを表す喫水線が壁に書かれていた。

13時に高野さんに会う。原発に反対して40年という闘士は、しかし見るからに温厚な好々爺である。高野さんの



横倒しになったビル

案内で早速女川原発に向かう。途中、仮設住宅を抜けていく。高野さん自身、仮設住宅暮らしとの事。しばらく行くと、地震と津波で徹底的に破壊された



原子力センター

原子力防災対策センターに出る。この建物も壊滅的な様相を呈して



原子力防災対策センター

おり、防災としての機能は全く残っていない。隣接して建っている「原子力センター」も同様に見る影もない。更に、海岸線を女川原発に向かう。地震によ

って道は波立ち、海岸が車と同じ高さに見える。海岸線に沿って、人家がちらほらある。

しかし、道は原発まで一本しかない。福島のような事故があったらどう逃げればいいのか（たまたまここは、危機一髪で回避されたけれど）。30分ほど走って、女川原発に着く。勿論原発の構内には入れないので、資料館に行く。雨模様で、人っ子ひとりいない。しかし、資料館の案内嬢は2名もいてにこやかに私達を迎えてくれた。立派なパンフレットをもらって館内を見学する。格納容器の模型の横に、制御棒が原子炉に挿入される模型がある。BWRなので、スイッチを押すと確かに下からゆっくりと制御棒が上がってくる。でもずいぶんゆっくり



制御棒の模型

だ。こんなスピードで大丈夫なのだろうか、それと

も模型だからゆっくりで、本物はもっと早いのだろうか、そんなことをガヤガヤ話しながら、最上階に上がると全景模型があった。資料館は丘の上にあるので、本当なら原発の全貌が見えるはずだが、木立などの障害物で見通せない。



使用済燃料輸送容器（キャスク）模型

どうやら、模型で想像するしか、ないらしい。高野さんから、原子炉がおかれている場所や、防潮堤、排水溝の位置などを解説してもらった。非常用電源の位置を東北電力に問い合わせているが、回答をもらえていない、といった話を後で聞いた。ところで、女川原子力発電所の概要は以下の通りである。

- | | | | | |
|-----|---------------|------------|------|---------|
| 1号機 | : BWR Mark-1 | 1984年6月1日 | 運転開始 | 52.4万kW |
| 2号機 | : BWR Mark-1改 | 1995年7月28日 | 運転開始 | 82.5万kW |
| 3号機 | : BWR Mark-1改 | 2002年1月30日 | 運転開始 | 82.5万kW |



女川原発全景

「ここからは、原発の全貌が見えないので、一番のビューポイントに行きましょう」と、高野さんに促されて、海岸線を走る。10分ほどで、女川原発を正面に見る海岸線に着いた。確かに真正面に女川原発が見える。海岸でカメラを据える工事をしている人が数名いる。てっきり東北電力の社員かと警戒していたが、川井さんが気さくに声をかけ、民放の関係者だと分かった。定点カメラを設置しているとの事、ここから常

時原発が監視されることになる訳だ。それにしても、原発の前の防潮堤はまるでお飾りのように心もとない。どうぞ、浸水して下さいと言っているような光景だった。

ところどころに山桜の咲いている、山の中の一本道を女川に戻る。原子力発電とか放射能禍といったことが嘘のような美しい自然だ。女川病院で高野さんと別れる。

帰路、石巻の被災状況を見る。石巻市の市街を流れる北上川の東側の地区と西側の地区で、被害状況が大きく異なる。西側地区は今だにがれきのなかにあって、全く復旧が進んでいないようだ。がれきの中に道路だけがあった光景。日向山に登るとそうした状況が一望できる。



石巻市の被害光景



レールのない仙石線

これで、女川原発が福島第1のようにメルトダウンを起こしていたら、この石巻市もこの地獄のような光景が更にひどい事になったのだろうと考え、ぞーっとした。生活を守るためという理由で、原子力発電所を持ち続けようとする考えが、どのように考えてもおかしいと、改めて思い至った。

途中、レールのない路線に再開のめどが立たない仙石線のホームだけが、ひっそりとあった。

2012年6月 長谷川 泰司